

Ed.ベンだより



〒 242-0007 大和市中心林間 3-16-12 グリーンコーポ中央林間 107

電話 / Fax 046-272-8980 Email: toiwase@edventure.jp URL http://edventure.jp/

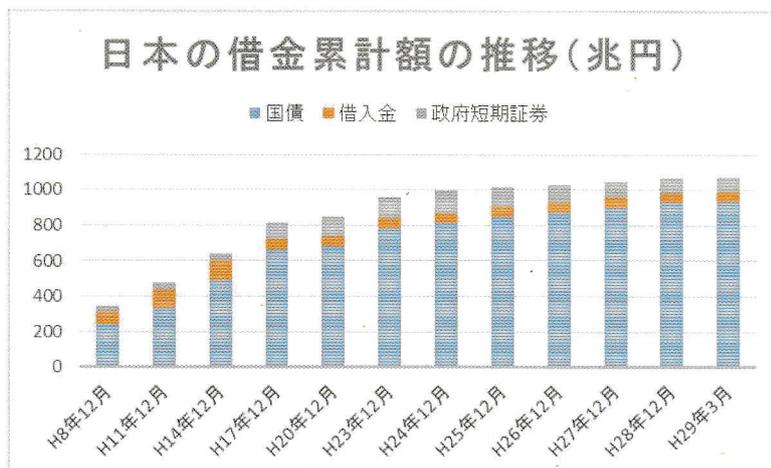
「冷めた視線」と「分かち合いの智恵」？

若い人たちの中で「シェア」の感覚があたりまえとして広がっているようだ。住まいをシェアするなどはもうあたりまえのよう。車を個人で持たなくなった若者向けに、車をシェアするシステムもよく見かけるようになった。安上がりにも、そしてリスクをひとりがかぶらないようにという、若者達の知恵なのだろうと思う。教育現場でも「共に生きる」という言葉を簡単に使ってしまうけれど、ではどうすれば「共に生きる」ことなのか、その具体性は乏しい。そんな大人達を尻目に、若者達は若者なりに、ライフスタイルを模索しているのかもしれない。住まいや車などの「モノ」だけでなく、情報もシェアしながら、生活を楽しんでいるのかもしれない。住居のシェアなどは、まるで昔の「長屋」のような、日常的には相互干渉ながら、何かあれば相互扶助の機能が働くシステムがあるようにも思われる。現在の40代以上の感覚とは違い、抑制的な生活スタイルが浸透してきているのかもしれない。まるで「豊かさ」への幻想を捨て、「身の丈にあった」生活を望んでいるようにも思うのだ。世の中がグローバルだ、経済発展だ、と騒いで必死になっている一方で、若い世代は「現実」を淡々と見つめながら、明日のことを考えているのかもしれない。そして、この現実的な姿勢は、政治や社会への「冷めた視線」とセットであるような気がする。

新聞には今週、「景気拡大期間が戦後最大になった」と報じた。つまり、どうやら日本の景気はとってもしららしい。過去最大規模のGDPを実現し、失業率も大きく減った。訪日客は（インバウンドと言うらしい）どんどん増えているし、株の動きも堅調のようだ。これだけ聞けば、本当に言うことなしの豊かな日本だ。新聞に載っている政府の発表なのだから、間違いはあるまい。フェイクニュースなわけでもない。

しかし若い人たちにこのニュースを聞かせたら何というのだろうか。まるで遠い国のことのように「そうなんだ・・・」というのではないだろうか。豊かさの実感なんてない。これだけ格差が騒がれているのに、これだけ働いてもゆとりのある生活もできないのに、若い夫婦が子育ての費用が心配で二人目の子は諦めているのに・・・。

将来の不安となればそればかりではない。AIに仕事は奪われるらしいし、年金は自分たちの



のころはもう出ないだろうと誰もが言っている。消費税は今年の秋に上がるけど、きっと将来はもっと上がっていくんだろうな。高齢化+人口減少で、ひとりの高齢者をひとりの若者が支える時代が来るそうだ。

戦後最長の景気拡大の裏では、国の借金はどんどん膨らみ、現在1千兆円を超えて増え続けている。1千兆円って、1に0がいくつつくんだ？借金した金を、そのまま景気回復に使っている

だけなのではないの？まして、企業の利益から人件費に回した「労働分配率」は、66.2%と43年ぶりの低水準だという。結局儲かっても賃金には回さなかったってこと。いや、実質賃金は下がっているそう。これだったら、フェイクニュースであった方がよっぽどまし。事実なだけに若者に申し訳なささを感じる。(今回の厚労省不正統計で、実質賃金の低下は、以前発表されていたより実際は相当下がっていたようだ・・・目も当てられない！)これでは、政治や社会に冷めた視線を向けたくなるのも、うなずける気がする。

若い世代に意見を聞いてみたいことに、新しい学習指導要領への感想もあげられる。皆さんは読んだらどうか。今までの学習指導要領と違い、何せ長い。読んでいていやになる。でも、「今までと同じじゃダメなんだア」という、気合いみたいなものは伝わってくるので、なぜか圧倒されそうになる。そこで、ちょっと遠くから眺めてみると、結局は、さっきの「景気がいいよ」の話とあまり変わらない。「個人の幸せの実現」を目指しているようには受け取れず、それより「経済発展に貢献できる人材の育成」という経済界からの要求があちこちプンプンにおいを放っているように感じてしまうからだ。不透明なグローバル経済の、企業戦士養成のための手引き書のような。背中を押される側にいる若者達は、これをどう読むのだろうか。「こんなに頑張れないよ・・・!」。そんな声が聞こえてくる気がするのだ。

負けるな、負けるな、発展だ！ 時流に乗ってチャンスをつかめ！・・・そんな生き方ができる若者も確かにいるだろう。でもほとんどの若者達は、住居や車を複数の人間でシェアしながら、お互いの生活に深く踏み込むことはしなくても、困ったときはチョッピリ助け合い、身の丈に合った生活を都会の片隅で送ることを選び始めているのではないだろうか。それは、「分かち合う知恵」とでも言うべき、新たな生活感覚の萌芽なのかもしれない。

学校が学校の役割を捨てられない以上、教員は新学習指導要領にそって、やっぱり「発展だ、がんばるんだ」と、矛盾を感じつつも教えるのだろうけれども、それでも一方で、冷めた目で政治や社会を見ている若い世代と、これからの身の丈に合った生活スタイルについて、一緒に考える仲間に入れて欲しい気がするではないか。私たちもまた、実は「経済発展病」の保菌者なのかもしれないのだから。

2/23 (土) 教育講演会のご案内

私たちが知ることもなかった原発労働の実態から、私たちが気づかないところで他者を犠牲にして生活していることを、まずは皆さんと一緒に考えたいと思います。そして、日本では今後「労働」がどうなっていくのか、外国人労働者の問題も大きく浮上する現在、学校教育での「労働に関する教育」「キャリア教育」のあり方も含めて考えていきたいと思います。

講師は歌手の寺尾紗穂さんです。難しく思われるテーマを、ピアノと歌を交えて、身近なものとして提起して下さる予定です。

NPO法人教育支援グループ「Ed ベンチャー」教育講演会 2019

原発労働と私たち... そして教育

知るべきこと 伝えるべきこと

「知らなかった」不都合なことを、「知ってしまった」とき、私たちはどうするのだろうか、やはり「知らなかった」ことであるのか、それとも知ることによって避けられるべきことなのか、「既に存在する」問題で諦めつつも、なんとか解決したい人々もいるとしたら、その人達を救うにはどう「共に生きる」道を模索していかなくてはならないのか。

原発労働は、働くというより、いのちを売り渡すことに等しい。しかしその実態は、前に隠され、「安全」にすぎず、隠されてきた。そんな情報が私たちの生活の中で広がった。「知らなかった」不都合なことを「知ってしまった」が、私たちは本当にどう対処していくべきか。私たちの生活には、どうした「不都合」が待ちかまえているのか。そして、私たちは「知ってしまった」私たちが、誰に、何を語り始めるべきなのだろうか。自分自身と「原発」の関係性には、そして子どもたちは、誰に、何を語り始めるべきなのだろうか。

2019年
 2/23 (土) 100名
 13:30~17:00 (受付 13:00)

会場 大和県立大学 学習センター (IKO) 多目的ホール

参加費 一般：1,500円 学生：500円 (高校生以下無料)

講師 寺尾 紗穂 (ピアノ弾き語り音楽家・本宅ギタリスト) 松田 洋介 (電気工・労働者・教育者)

【理事のつぶやき】 一週間の海外旅行で外国人になった。目にする、耳にすることは分からない。頼りになるのはガイドブックと日本語ガイドさんだけだった。分からない不安は消えることなく旅行は終わった。学校には多くの外国人の子どもたちがいる。彼らの多くはおとなしく手がかからない。だからといって不安や困り感はないのだと言えるだろうか。学校はそれに気づき対応できているのだろうか。彼らの心の内を想像出来る力を持った援助者になっていきたいと改めて思う。(SH)